

始めの始めに

この『二元世界』は世界観であり、一つの私的世界解釈である。

人は普段意識していなくても、理路整然と説明できなくても、それぞれに世界を解釈している。人は世界を解釈し、日常生活に秩序を見出し、秩序にのっとって生きている。

人だけでなく動物も「危険か、安全か」「敵か、味方か」の**原初的判断**で生き残ってきた。人も意識しなくても危険を避け、必要なものをえている。

原初的判断は、世界に**秩序**があるから成り立つ。世界の秩序はできあがった強制力ではない。運動秩序として、相互作用として、物事を区別して成り立たせる作用である。物事の存在はそれぞれの秩序として成り立っている。

原初的判断を支えている認知能力は、生物進化の過程で獲得された。認知能力の基礎である感覚は、多様な刺激に区別される秩序として対象を認識する。

また認知能力は、生まれてからの訓練で身につく。感じること、食べること、歩くこと、話すこと、様々な能力のすべてが、失敗しつつ繰り返しの訓練によって身につく。遺伝として与えられた能力も、訓練によって使えるようになる。

「理解もしないで行動するのは無分別」とされるが、道具であれ、機械であれ、すべてを理解しなくても使えるし、利用している。世界を説明できなくても食べて、寝て、目的を見だし生きている。理解できるまで待つのではなく、より理解しつつ生きている。

人間は秩序に従うだけでなく、秩序を利用することで

秩序を理解する。秩序を組み合わせて利用する。人は意識しなくても対象秩序に意味を見出し、時に意味をこじつけさえてしまう。

動物も人もそれぞれの生活環境に適した媒体、感度、表現による感覚を獲得してきている。生活環境に適応して進化し、生活環境の中で能力を発揮する。人の時空間感覚からして人の生活に適している。

感覚も思考も人に適しているから、そのままでは特殊である。やがて人は青年期に自らと世界を反省するようになる。世界の中の自分を意識するようになる。人は原初的判断を意識し、反省することで世界と自分をより普遍的に理解するようになる。普遍的世界に自分を理解し直して、人間として成長する。

人は秩序を意識的に対象にし、感覚表象世界を受け入れ、知覚表象として意識し、知覚表象を用いて思考している。秩序は因果関係、法則として現れるから、結果を予測できる。関係の関係秩序から、直接確かめようのない過去も、未来も、無限をも対象にできる。人は世界の秩序を見いだすことで、未来を選択できる。

人の**意識**が対象にする**物質世界**は相互作用関係としてある。人も物質間の相互作用関係にあって、自らの生命秩序を維持している。代謝秩序を維持することで、健康に暮らせる。人は相互作用関係にあって、相互作用している対象を意識する。

人の意識は自らの心身を制御し、対象と自らを一つの物質世界としてとらえている。人は全体世界の部分、一個の存在でありながら、全体を個である部分に反映し、

反映する自らをも対象にする。位相＝連なり具合からして単純な相互関係の次元を超えて、人は世界全体を部分のうちに、意識に取り込む。

世界を感覚する自分、感覚する自分を意識する自分、意識する自分を意識する自分、その自分を意識する「無限後退」と呼ばれる関係に至る。対象世界とは別次元の内なる観念世界に至る。人の意識は物質世界とは別次元の**観念世界**を創造している。物質世界次元を超える意識にとって、物質世界と観念世界の関係は自らの存在を問う**根元的問題**である。

観念世界は心身の対象である物質世界とは別次元の世界であり、存在の仕方が全く異なる。「観念世界は存在するか」と物質世界での存在と同じ意味で問うこと自体が無意味である。

観念を作り出す意識にとって、観念が存在することは自らの存在として確かである。意識自体が意識にとって観念としてある。意識にとって自らの存在は絶対的である。

意識にとって自らの絶対的観念存在と、日常経験で対象にする様々な物質存在は同じではない。意識は自らの身体が細胞ででき、自らが脳神経細胞の活動によって物質世界に実現していることを知ることはできるが、意識自らの存在が他の物質と同じであると確かめることはできない。意識は物質を対象にできるが、意識自らを物質と同じように対象にはできない。

物質世界と観念世界との異なる次元関係を経験的に説明する。

左右の眼を交互に閉じたり開いたり試して見る。物がずれて見える。眼で見ているのは確かで、両眼には視差があるからずれる。しかし両眼で見るとずれはない。ずれない像は、眼ではなく脳で観ているのである。脳が調整しなければ、二色の眼鏡で見る立体図のように、

ずれた二重の像が見えるはずである。眼で見ているのではなく、眼で見たずれた像を脳が解釈して立体的に観ている。意識がつくりだした対象像を、意識が観ている。

あるいは自分の声は録音した自分の声とは違っている。録音した声こそ他の人々が聞く自分の客観的声である。自分が直接聞く自分の声は録音もできないし、他の人に聞かせることもできない。自分の身体を直接伝わってくる声を聞くことのできるのは唯一自分の意識である。自分が聞く自分の声と同じ響きを音響技術的に作ることもできるかもしれない。それでも同じであるかどうかは自分だけにしか判断できない。

人が感覚として感じているのは、意識が作り出した意識の**内部表現**である。内部表現に知覚表象としての対象をそれぞれ区別し、観念世界を作り出している。意識によって構成される、物質関係を越えた観念世界が確かにある。

神経系での情報処理を統括、制御する中枢神経系の活動として**生理的意識**がある。脳では身体内外からの大量の情報を同時並行処理している。生理的意識はその情報制御を統一し、方向性を定めている。多様な情報に優先順位をつけ、当面する一つの目的、課題に注意を向ける。生理的意識が生理的關係を超えて対象を観ている。脳に生じる生理的意識を超えた意識は、意識自体を対象とする**自己意識＝自意識**である。意識が意識を**反省**するのが自意識である。意識による自己確認が自意識である。

自意識は自らに**再帰**して自らを対象化する、**自己対象化**によって実現する。論理的には**自己言及**である。物質のうちに実現する意識が再帰し、**特異点**になって自意識を観念として実現している。特異点では媒体は連続していないながらも、質が不連続になる。特異点は質的に行き来できない地点である。

自意識には生理的意識全体を意識することはできない。自意識が意識できない意識は**無意識**、潜在意識とよばれる。

自意識は注意した対象を再帰して意識するため、注意を遅延して意識する。神経細胞網の信号伝達時間によって意識自体での対象処理がすでに遅延している。自意識は再帰による反省として、生理的意識の結果を追うだけである。自意識は対象のすべてを実時間で意識できない。同調するために意識は先読みしている。

自意識は一つの対象にしか注意を向けられない。自意識は時間分割して、注意を複数の対象に振り分けている。自意識はタイム・シェアリング・システムで複数の対象に注意する。

自意識は意識自らを対象にするだけでなく、感情、感覚、身体を対象にして反省する。感覚、感情、身体の有り様を意識することでも、自らを自己として意識する。感覚、感情、意識、自意識からなる自己が心である。心は自らの身体制御をする意識、意志も自己とする。

さらに意識は道具を使いこなすとき、道具の先端にまで及ぶ。意識は他者の感覚、感情ともつながり、共感する。人の脳が他者と共感する機能を備えており、自意識は他者との共感を意識できる。人々との社会関係を意識するとき、自己の影響力が社会的に作用することを実感することもできる。

さらに人それぞれに過去の実績があり、未来に働かせることもできる。自己意識は時空間的に拡張可能である。どこまでが自己であるかは、自己意識が対象を何にするかで決まり、自己意識は対象化することで存在する。意識拡張の究極は世界との一体感にまで至る。自意識の意識する自己は世界にまで拡張できる。

また意識には程度があり、対象と一体になるほどの集

中した意識が最高である。

自意識は観念として**主観**であり、自意識が対象にしているのも主観である。主観は観る者であり、かつ観ている物でもある。再帰する観念であるからいわば主体でもあり、対象でもある。

主観は反省し、対象間の関係に自らを位置づけることで**客観**を獲得する。主観と客観の対立関係を心身の制御実践で統一し、**実観**として確かめる。

主観は物質世界に干渉し様々な悪さをしてきた。自然科学者ですら主観にとらわれて誤解や妄想をする。適当さ、自己欺瞞などの主観性は主観を対象にして客観することで明らかになる。主観を否定して客観し、客観に主観を**重ね合わせる**ことで世界を実観できる。

意識は物質世界に実現したが、自意識を観念のうちに封じ込めている。観念のうちに封じられた自意識は主観として観念世界を観る。主観は観念世界を物質世界に重ね合わせる。物質世界と観念世界の重ね合わせては時にずれる、二元の実在世界としてある。物質世界は主観にとって客観世界であり、主客を含み重なり合う実在世界が実観世界である。

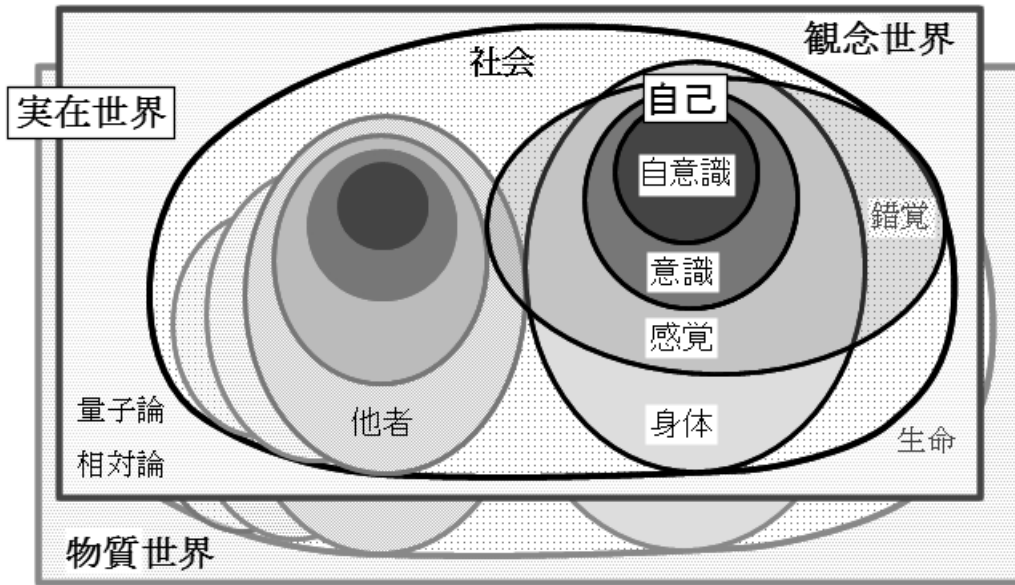
この世界を次ページ「世界図」にしてみた。

太古の昔から人類は世界を問題にし、世界観を、哲学を開陳してきた。世界を理解しようとして科学が発展し、多様な、大量の知識がもたらされている。それら知識を活用し一つの世界観体系を示すことは、今より情報量の少なかったあまたの天才達とは違った、それなりの努力が必要になる。

それにしても哲学的議論というものは、始めてもなかなかかみ合わない。議論の前提が一致していない。むしろ前提を疑うのが哲学である。

そこで始まりの地点を、前提ではない前提を定めた

世界図



この「世界図」は物質世界と観念世界の二元からなる実在世界を表現しようと試みた。

常識の世界は「ビッグバン以来、宇宙の歴史過程に地球ができ、生命が誕生し、進化の末にヒトが生まれ、意識を獲得した」とされる。

ヒトの身体は生理的代謝で物質を交換し、自己と対象とを区別して存在する。身体は自己の身体を制御する神経系に感覚を獲得した。感覚は自己の感覚を制御する脳に意識を獲得した。意識は自己の意識を制御する自意識を獲得した。人は身体、感覚、意識、自意識を自己として構成する。

自意識は主観であり、観念であり、対象のすべてを観念として観念世界を創りだす。意識は自己をも対象にする観念世界を創りだす特異点である。世界は人の意識を特異点にして、物質世界に第二の観念世界を創りだす。相互作用によって成り立つ物質世界に、意識によって一方的に対象化する観念世界を創りだす。そうしてできた二元の世界をこの図に表す。

自意識は自らを対象にする主観にまで後退するが、逆に拡張もする。道具を使用する時はその先端にまで達する。他者の感覚、感

情にまで拡張して共感し、影響して社会関係にまで拡張する。意識拡張の極みはときに世界との一体感にまでおよぶ。

しかし自意識は観念世界から抜け出ることはいできない。観念世界は感じた物事、知った物事、経験した物事だけからなる。対する物質世界は未知の物事が限りないどころか、基本的物事も分かっていない。物質世界は人の生活経験での理解を超えている。粒子は波動であり、量子はもつれて局在しない。空間は重力で歪み、同時性は成り立たない。生命を絶つことはできるが、新たに生命を創り出すことはまだできない。生命も物質次元を超えている。

意識は世界を概念の論理関係として表現する。しかし論理関係は相互規定するだけで、実在世界との関係を規定できない。

人は秩序を見いだし、秩序を見通して選択し、生きる。人は対象に秩序を見るあまり錯覚までする。意識は主観を反省し、客観に重ね合わせることで、実観をえる。人は観念世界を物質世界に重ね合わせて実在世界に生きる。

い。それが哲学の一般教養である。哲学するからには押さえておくべき一般教養を整理する。科学が蓄積してきた基本的知識を配列する。

特別な専門知識は必要ない。解説書に紹介されている知識ばかりである。インターネットで検索すれば確かめることができる。

私には哲学の素養はない。私には科学の素養もない。私に科学を説明、解説する力はない。しかし気楽なことに生きることの専門家はいない。個別科学がそれぞれの分野に専門化し、科学者それぞれが、それぞれの専門分野の外では素人でしかない。それぞれが生きていく世界解釈では皆が素人である。例え専門家がいたとしても、自分の人生を他人に任せることはできない。専門家と素人の区別がないうちは、すべての人々が生きることの専門家である。生きる世界を哲学する。